

著者の了
解により
検印廃止

昭和39年6月10日 第1刷発行

あいかなとき
愛と悲しみの時

著者 平林たい子
発行者 野間省一
印刷所 東洋印刷株式会社
(製本国宝社)
発行所 株式会社講談社

¥ 260

東京都文京区音羽町3ノ19
振替東京3930
電話東京(942)1111(大代表)

© 平林たい子 一九六〇

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)

愛と悲しみの時

平林たい子

Roman Books

愛と悲しみの時

戦争の贈物

箱根の宿は、仲人の山中課長からの口添えがあったので、家族風呂付きの立派な離室をとってあった。

この頃のはやりらしく、広幅の檜天井が真中から両側へ合掌型に傾斜して、手漉きの和紙を透かしたはめ込みの螢光灯がほんのり灯っていた。

そのやわらかいあかりの下で二人ははじめてさし向いの夕食を終った。しかし女中が膳をさげに來た頃から庄一郎は無口になって、煙草の灰をぼとぼと卓の灰皿に落すばかりだった。千江子も、何か事が迫って來た面映ゆさに、言葉がのどで凝ったように出て來なくなつた。

戸外では、庭の笥の水が風でときどき落ちる音をかえる。

「ひどい風になりましたね」

枕掛と敷布をもつて入って來たさっきの女中は二人のてれた様子を救うように、慣れ切つた声をかけた。

千江子はだまっていた。庄一郎もだまっていた。

女中は、そんな風情も見なれてるので格別好奇心な目

も向けなかった。あけ放した襖の向うで、彼女は白い毛布や臘脂の羽根布団をひろげてぶわぶわと糸埃を立てる。白い敷布は雪のように白く、臘脂の赤は天井まで映えてばあつと赤かった。

「も一度風呂にお入りんなんて、あたたまつてからおやすみになるとよござんすね」

女中は心得顔で教えるように言った。

「はあ」

しかし、庄一郎がだまっているの、千江子は、とりつく島もなかった。千江子もててはいるけれども、庄一郎は男だから、何とかぎごちないその場をリードして氣がるなしゃれでも言ってくれそうなものだと思つていた。

女中が去ると千江子はどうとう、

「どうなさいます。も一度お入りんになりますか？」

と自分から庄一郎にたずねた。さっき二人は別々に一度入っているのだった。

「君は入っていらっしゃい。僕はもう沢山……」

その言葉は、まるで錘がついているように重かった。

千江子は息をのんで、彼の顔を見た。

が、庄一郎は顔をそむけて千江子の追つて來る目ざしをさけていた。その無表情は厚い壁のようなもので、そ

これから千江子が心の中へ立入ってくるのをかたく拒絶しているように見える。

東京駅で、見送りの人々から花束など貰って電車にのり込むまでの彼は快活だった。生れてはじめて二人きりで電車にさし向いになってから、千江子は、庄一郎の挙措に何か気になるものを感じはじめた。

戦地で爆弾の破片をうけたため、右足がほんの少し引摺るということは、仲人にはじめからきいて知っていた。銀座のレストランで見合して一緒に外に出たときにも、彼の歩き方を見て、「ああそうだった」とそれを感じ出した。けれども、予めきかされていたことであつたから、その不幸をいたむ暖い思いが胸に湧いただけだった。

しかし、ここにくる電車でその片足の靴をひきずって手洗に行き、かえつて来て向いの席に腰をおろしたときから様子は変っていた。彼は、自分を見ている千江子に無生物のようなよそよそしい目ざしをかえして自分だけの思いにこもっていた。千江子は胸を突かれた。それに、二人だけの旅はもっと詩のある甘いものかと想像していたのにその前からさし向いの席で、彼は、ポケットに入っていた印刷物を出してよみつづけていたのだった。

いつまでもそれから目を離さないの、それとなくのぞいてみると、何のことはない、今日の結婚式場だった華燭会館の営業目録であつた。すでにそこで式を終っているのに何のためにそれをよむ必要があるのだろう。それに全部よんでも五分とかかりそうもない印刷物に、いつまでも顔を傾けているのもわけがわからない。しかしまだ打ちとけて話し合ったこともないのだから、それであるのだと気にしないことにしてその場はそれで忘れた。が、ここについてからの挙措も全くちぐはぐで二人の気持は行き違つていた。

千江子は、庄一郎がやめるというのに一人だけ立つて風呂にも行きかねた。彼女は恨みをひびかせた声で、
「……わたしもやめにいたしますわ」

それなら、自分も一緒に行つてやろうと思つたのに庄一郎は何も言わなかった。また始末しようもない沈黙が挟まる。彼はねる支度をするでもなく、書院窓の小机にあつた宿の絵はがきに見入っている。それがまたちやうどひるま電車で営業目録を見ていたときのような、ながい時間であつた。

千江子はそんな無意味な時間に居たたまらずに立上つて手洗に行った。かえりに、洗面所の窓から、黒い山の稜線を眺めていると、ぼつんとふもとについた灯が悲し

い千江子を見成っているように風の中で息づいていた。

いまごろ、実家の父母や妹は、婚礼に出席のため大阪から上京した従兄の陸男と一緒に、自分たちの様子を描いて話題にしているにちがいない。誰もこんな硬い雰囲気想像している筈はない。

二人はまだ接吻さえ交わしていなかった。千江子は、いつのまにか涙ぐんでいた。しかし考えてみると、電車の中でも自動車の中でも、千江子にはに candebakari いて、自分から男性によりそって男の生まれたままの固い心をほぐしてやるという努力はしていなかった。

彼があんなに頑なに心をとざしているのは、自分の愛情の訪いが生ぬるくてまだその扉がひらかれていないということなのかも知れない。

千江子は、自分が彼の胸の中に移り棲んでいないのかと思うと愕然とする。急に必死な気持になっていた。

彼女は体をひるがえして、あまり巧でない媚を頬につくりながら寝室への扉をあけた。

「少しねむくなりましたわ。もう九時ですのね」

ああ、こんな言葉を、新婚の初夜に女から言わせるとは男は少しひどくないだろうか。想像の上では、庄一郎が言葉で綴りきれない愛情に破れそうなほど興奮して、暴力に似た荒々しい力を千江子の上へむがむじにふり注

ぐものときめていたのに――

「もうやすみなさい。僕もすぐねるけれどね……」

と彼は言った。

「はい」

まだ彼の手には四枚一組の、この宿の絵はがきが握られていた。彼は、千江子が寝室の襖をあけたけれども腰をあげようとはしない。こんな微妙な時に千江子は、庄一郎にもう一度声をかけるおどけ者の立場に立つことはできなかった。

宿の浴衣と丹前とは、きちんと箱の中にたたんであった。しかし千江子は、スーツケースから華やかな友禅の寝巻に浴衣を出して、いままで固くるしく着ていたカクテルドレスのホックをピチピチ外す。

「おさきに――」

彼女はかるい羽根布団を体のかさだけ盛り上げて毛布の襟をあごにのせた。目は薄くつぶりながら、隣室の庄一郎をじっと見ていた。とても眠るどころではなかった。一時間半ほどしているうち、火鉢の火がなくなったのか、庄一郎は立上って、例のかるい跛をひきながら寝室に入ってきた。

千江子は、なぜともなく、眠ったふりをしないではいられなかった。庄一郎は立ったまま、隣室のあかりで千

江子の寝姿をちょっと見下した。そして、引返して灯を消してくると丹前をきたままごろりとふとんの中に入つて、向う向きにねた。

庄一郎が床に入つた時、さすがに千江子は緊張して胸がときめいた。しかし、廊下のあかりで見える庄一郎の布団は、一とつづきの山脈のように堆高いまま動かない。予期していたとはいえ彼が千江子をこれほど無視してたとはやはり意外だった。千江子は緊張をゆるめながら何ともいえない失望に落ち込んだ。けれどもやがて事の多かつた一日の疲れで失望のまま、引込まれるような眠りに入ってしまった。

なれない室で夜中にはおどろく程庭の笥の音も高くなつた。千江子は樹木をならす風の音にも何度か目をさました。そのたびに庄一郎の方を見たが、彼は身動きもせずに眠っていた。

しかし、あたりが青く澄んで夜があけはじめると、千江子は理性が息をふきかえたように思慮ぶかくなつていた。はじめての夜に庄一郎が千江子の床を訪わなかつたことは、ゆうべ思つた程重大事ではないのかも知れない。

見合結婚で、二人はいままで知らない他人だったのだ。二人の間に何か雰囲気が生まれるまで、彼は慎重に

そのことをのぼさうというのではなからうか。千江子のほんとうの気持はそれほど庄一郎の肉体を求めていたわけではない。むしろ、その事実を想像すると、無惨で疎ましさの方がさきに立つほどである。けれどもただ、慣習として、その垣を向うから越えて貰わないことには、何か二人の間に見えない境界が立ちのたかっていた。庄一郎を愛しはじめている千江子にはそれがもどかしかったのだ。

千江子は、つとめて快活になつて、彼が起きないうちに風呂場で化粧してから髪を直しにかかつた。華燭会館の美容師が結ってくれた髪はあまりに個性のない七三分けの外巻きだったから、自分でセミアップに梳き直して、毛さを自然にうしろへたらすことにした。彼女は、ゆうべの懊悩から見ちがえるほど表情に深味を加えていた。赤くぬつた唇は、何か不満を現わして、むずむずと蚕のようにうごめいていた。

室にかえつてくると、庄一郎はボーチの椅子から凄艶になつた千江子を眺めた。

「あら、いつお起きになりましたの。お目ざめのときにあつい蒸したオルをもつてつてあげるつもりでしたのに」

「そう、それは早まつたなす。もう一度ねるかな」

「ええ、そうして下さいまし。はじめの習慣が大事でございますからね」

千江子は笑いながら、風呂場にひきかえして湧き口のあつい湯でタオルをしぼった。室にかえってみると、庄一郎はほんとうに床の中に戻っていた。

千江子は、彼の枕元に坐って、よい匂を漂わせながらたたんだタオルをさし出した。きのう一日で、あごのまわりの髯が大分青くなった庄一郎は、何か男らしい体臭を發してそれを手にとった。

結婚まえの千江子の新家庭設計では、そのタオルで毎朝彼の顔から手から背中まで拭ってあげてから起す筈だった。が、他人としての境界がとれていない夫の体に、無遠慮な手をのばす勇氣はなかった。

庄一郎は起上った。彼がきのうの快活をとり戻しているのはうれしいことだった。二人は朝飯がすむと早速出發することにした。予定ではこの宿に二晩泊ることにしてあったのだが、狭い室の中に、二人きりで顔を合わせていることを、庄一郎が好まない風だった。

箱根から熱海まで、二人はハイヤーにのることにした。ゆうべの風が凜いだから、冬の空は鉄を磨いたように晴れわたっていた。明るい空の色がうつるためか千江子は彫りの深い目ざしをしていた。彼女は、庄一郎と並

んで、気にならない程度に、体をすり合わせた。そのうちに、庄一郎の方から、千江子の手を探して来た。千江子はバックミラーを気にしながら、こっそり彼の手を握っていた。果物が熟するように二人の気持は自然に熟して行つた。

「幸福ですわ——」

千江子は酔つたようにささやいた。

「僕もだ……」

運転手の目がなければ、千江子は庄一郎の膝に顔をふせて、きのうの怨みを思うさまくどきながら温い涙をしとど彼の肌に徹してやりたかった。そんなことをかつて求めた千江子ではなかった筈だけれども、彼女は、知らず知らず、今晩の宿でのくるめく激情を思つて空恐しいような期待をもつた。

ホテルについて見ると、まだ昼前だった。二人は荷物を置いて、金色夜叉の碑を見ながら、海岸をひとしりドライヴして、食事をとるため、小料理屋に入った。

この日も、千江子は、早く室に落ちついて二人きりになりましたがっていた。けれども庄一郎は、いつまでも他人の中にまじつて歩きたがっていた。

「早く宿についたってつまんないよ。こんなに晴れて海もきれいなのに、お湯にばかり浸っている気はしないね。」

お爛徳利じゃあるまいし」

「でも、わたしは、貴方とじっくりお話がしてないから——男の方って、どうしてこんなに外がお好きなのでしょうね」

「これから、いやというほど話をする機会がありますよ」

庄一郎は千江子の希いからするするとうまくぬけ出していた。

しかし、ひるすぎになると、空が曇って、海は鉛色になった。寒い北風が海の方から吹き出した。いや応なし二人はホテルにかえった。

「いま、家族風呂の湯加減がちょうどよろしゅうございます。どうぞ御一緒に——」

中年の番頭がドアの外で声をかけた。

「ああそう、どうもありがとう。じゃあ……」

千江子は、目をつぶって谷底にとびおりるような気持で庄一郎と一緒にのふろに入るつもりになっていた。自分の方から庄一郎に迫って行くことに心をきめたとき、千江子は羞恥のうす衣を思いきり自分で剥ぎとって、肚はきまった。

庄一郎は、千江子の焰のもえた表情を見て、若い女の感情の飛躍の幅におどろいていた。彼には千江子の心の

渦が手にとるようにわかっていた。それだけに、彼の心はくらく重い。

彼は、千江子と風呂を共にするのさえ何か憚られた。「ふるはあとにしよう。腹がへった」

と彼は言った。

「じゃああとにして、それからゆっくり……ね」

二人は親しそうに喋りながら室にとった食事をすました。

が、食後の柿を千江子がむいていると、庄一郎がふらりと立上った。

手洗いに行くかで見ていると、洋服箆笥のオーバーに重ねてかけてあるマフラをとった。

「あら、どこかにお出かけ？」

「いや、ピンポン台をのぞいて来ようと思って——」

今夜こそしんみりとわだかまりをとるためにたっぷりと落着いた時間を用意しておいたのに——と思うとかつと胸から涙が噴き上げた。

「わたしもまいりますわ」

「寒いよ。君は温まってさきに寝ていたまえ」

「いいえ、わたしもピンポンがしたいんですわ。さあまいりましょう」

千江子は、ぬいでいた靴下をはいて卓上のハンドパッ

グをとった。そのこなしは憤りに操られているはげしさだった。庄一郎は目を瞠って千江子の気負った挙措に氣をのまれていたが、

「やっぱりピンポンはやめよう。君一人にしておくのは可哀そうだし、つれていっても、大勢お客さんがいるだろうからね」

「そう？ おやめになります？ うれしいわ。わたしはまだ新婚二日目ですものね、もっと二人きりで、いろいろとこれからさきのことをお話しくちやならないんですわ」

「そりゃそうだね」

庄一郎は気弱く自分の思慮浅さをわらった。二人は柔いソファに向き合って街を流している懶そうなギターの音をきいていた。さきのことを話すといつても、まだ日常生活のはじまらない二人にはこれといって語り合う具体的な問題がなかった。

千江子が見つめている手の爪を庄一郎がそばからのぞき込んで、

「おや、爪にエナメルを塗っているんだね。無色のもあるのかねえ。はじめてだ。マニキュアはみんな赤だとはかり思っていたんですよ」

「いろいろございますよ。ピンクのものもなかなか上品です

わ」

こんなよそよそしい会話をとだえがちに交わしている間に夜がふけて行く。ひるの喧騒の間はきこえなかった海の濤音がきこえはじめた。もう寝ろと時間が訓えているのだ。

千江子は、さっきボーイが来て、隣室のベッドをととのえたとき、ベッドがダブルであるのを見ていた。彼女には、今宵のベッドがダブルがあるのはいかにも自然なまわりあわせだと思われた。恐らく、きょうの庄一郎には異存あるまい。二人は箱根からの自動車の中でそっと手を握りながら、幸福だと囁き合って熱海において来たのだ。

ところが、庄一郎は、手洗いに行きながら、あきかかった扉から、白い枕が二つ並んだ大きいベッドを見るとひどく晦渋な顔になってかえって来た。

そんなことに気づかない千江子は、彼が手洗いに行つたのをねる合図と見て、室の隅で赤い友禅の寝巻にかえていた。彼女はやはり夫の顔を正視できない面映ゆさで博多の伊達巻をシュツシュツと巻いていた。

「あなたのお寝巻は、ベッドの上に出しておきました……」

千江子は派手なきものの姿で消え入りそうに言った。

「ああ」

と庄一郎は答えてとにかくベッドの室に行った。

千江子もあとからついて行った。千江子は、庄一郎が持参の寝巻と替えるのを手伝って、ズボンや上着の始末をした。その間庄一郎は影のように立っていた。

一年さきに結婚した学校の同級生の打明話では、はじめての夜はにこんでいる彼女を夫が抱えて床の中に引きずり込んだそうだ。しかし、庄一郎はそんな気配もなく、ぼんやり立っている。この人は、自分が男の役をうけもたなければ、自分一人ではどうにもできない人と見える。

千江子は勇気をふるって、

「おさきに御免下さいまし」

と一と足さきにベッドに入って布団の片側をあけていた。うすみどりの電燈のシェードをとおす光で、千江子の目がきらきらと犬の目のように光っている。

もう絶体絶命だ。庄一郎は、もじもじしていたがいや応なしあとからベッドにのぼって来た。普通のわかい男性なら、思わず脇のさわった千江子を抱きしめて熱い接吻でも与える所ではなからうか。が、彼は、きちんと自分の両膝を並べて、いつまでも天井を向いている。

お互の呼吸が数えられるほどさし迫った五六分間がす

ぎた。

千江子は思わず庄一郎の胸に縋りついてさめさめと泣き出した。

「わたしがお氣に入らないんですわね。はつきり仰有って下さい。いまからでも東京にかえります。ね、はつきり仰有って下さい。これではあまりひどすぎます。こんなことって、きいたことがありますわ」

すると、彼ははあっと息をして、地底からひびくような冷静な声で、

「ゆるして下さい。貴女が氣に入らないのじゃなく僕がわるいんです。打明けよう打明けようと思ひながらその勇氣もなく、とうとう今日を迎えてしまつて……実は僕不能者らしい——背骨に爆彈の破片が入つたのを手術してから、急に足が跛になつただけでなくどうもひととちがうと氣がついたのはごく最近のことです。医者は治るというので、式のまえに治るつもりで貴女とも婚約したんだが——東京駅をたつときにも、何とか宿につく前に貴女の魅力で失つたものを取返えそうと一生懸命だったんです。がとうとうだめらしい……堪忍して下さい」

いつのまにか床一郎は床から起上っていた。千江子もそれにつれて起上っていた。

「あきれたでしょう。貴女こそ自由にして下さい。もし

貴女がここからかえるといわれるなら、貴女の純潔を証明するために僕は恥をしのんで自分の欠陥を発表します。戦争が悪いんだ。このことだけでもどれだけあの戦争を僕が憎んでいるか——實際僕の呪いは言葉ではいえないほんです」

「……そうでしたか」

千江子は涙の乾いた頬を向けてため息をついた。

「これだけは信じて下さい。はじめから計画したことではないということ——医者と言葉に引きずられて、ついうかうかと貴女をこんな運命に陥れてしまったんです。といったも僕を恨んでいるでしょうね」

「いいえ、いいえ」

千江子は力づくよく打消した。

「貴方には女の気持がおわかりにならないでしょうけれど、わたしは、そんなことをちっとも求めてやしないんですわ。むしろいやな位よ。ほんとです。そこが男とちがう所ですわ。しかし、そんな事情を知らないからわたしは嫌われていると思って悲しんでいました」

「大違いです。僕は貴女を一目見たときから、どうしても貴女を他人に渡したくないと思いました。その焦りもあって身の程もわきまえずに——ほんとにゆるして下さい。みんな貴女が好きだったからの嘘だったんだ。わ

かってもらえますか」

「わかります。わたしも貴方と別れたくありません。今だけの気持じゃありません。わたし達、兄妹のような夫婦になって仲よくくらしましょう。悪いのは、戦争ですわ」

「ほんとですか。一時の気持で約束してから、あとで後悔しても貴女の人生は半端になってしまうんですよ。大丈夫かしら」

「そんなことはちっともかまいません。それに、治るかも知れないでしょう」

「ええそれは医者が保証しますから。しばらくの間には、貴女の愛情の力できつと治ってみせますよ」

「じゃあ、もうそんなことは気にしないで、たのしく旅行しましょう。まだ休暇は一週間もあるのに、早くかえって、一生の思出を台なしにしちゃつまずきませんものねえ」

「有難う。有難う」

二人は握手して純潔な涙を流し合った。

その晩二人は、そっと手を握り合って、気持よく眠った。庄一郎にとっては、くるしい秘密がなくなつて、肩の荷をおろした安堵の夢だった。千江子にも、庄一郎の暗い陰影が消えて、自分に対する彼の気持の猜疑がなくな